

だ い す 通 信 令和5年 第4号

令和5年のマメシクイガの防除適期は、

1回目が8月23～25日頃、2回目はその7～10日後です。

前作が大豆のほ場は、マメシクイガ防除は2回実施しましょう。

1 生育状況

- ・県生育観測ほの8月10日時点の生育は、草丈・主茎長ともに平年を上回った。開花期は、平年より8日早い7月27日であった。
- ・8月10日巡回時点で、晩播狭畦栽培を含むほぼ全てのほ場で開花が確認された。
- ・生育の旺盛なほ場では、倒伏がみられる。

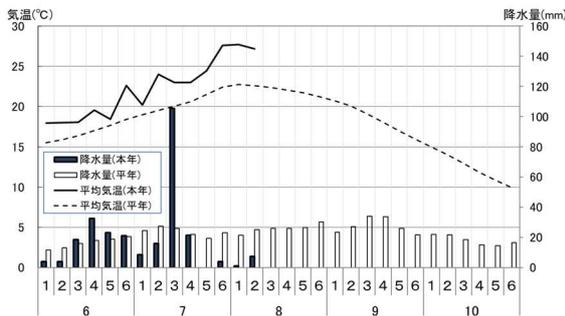


図-1 平均気温と降水量

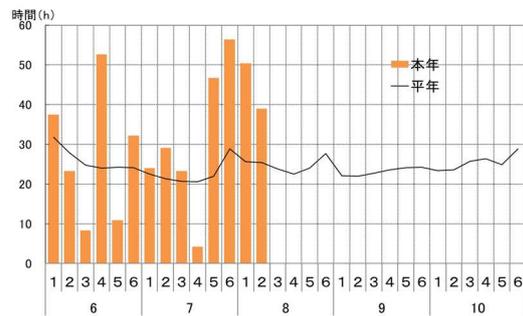


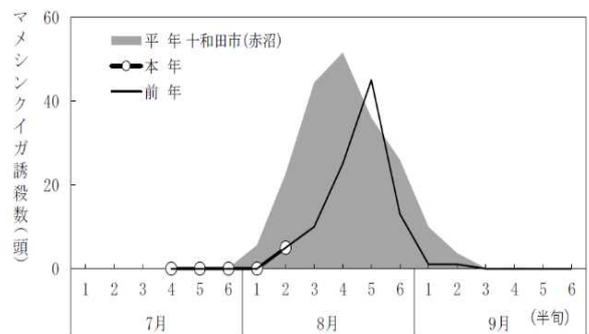
図-2 日照時間

表-1 生育状況調査結果

地点名	年度	は種期	生育ステージ			8月10日		
			出芽期	開花期	成熟期	草丈 (cm)	主茎長 (cm)	葉数 (枚)
県生観	本年	6月5日	6月12日	7月27日		124.6	79.3	14.1
十和田市	平年	6月7日	6月15日	8月4日	10月17日	83.5	60.3	14.7
下切田	差・比	早2日	早3日	早8日		149	132	-
地区生観	本年	5月25日	6月2日	7月24日		103.7	65.1	14.1
十和田市	平年	6月1日	6月10日	7月30日	10月12日	92.7	46.6	12.9
赤沼	差・比	早6日	早8日	早6日		112	140	-
晩播狭畦	本年	6月30日	7月8日	8月7日		87.2	55.0	13.5
七戸町	平年	6月25日	7月2日	8月10日	10月19日	0.0	0.0	0.0
	差・比	遅5日	遅5日	早3日		-	-	-

2 病害虫の発生状況

- ・8月10日のフェロモントラップ調査では、マメシクイガ雄成虫は8月10日から確認され、発生時期は平年よりやや遅く、誘殺数は平年より少ない。
- ・べと病の発生は平年より少なく、食葉性害虫の発生は平年より多い。



◆ 畑作・野菜病害虫フェロモントラップ情報（8月上旬）
キーワード：「アップルネット 病害虫」で検索
<https://www.applenet.jp/hatasaku-byougaichuu/>



3 マメシクイガ・カメムシ・紫斑病の防除

- ・ 8月上旬のフェロモントラップ調査によると、マメシクイガ雄成虫の発生は平年より遅いため、防除は平年どおり行う。前作が大豆のほ場は2回防除を行う。

【2回防除】1回目は8月23～25日頃、2回目はその7～10日後

【1回防除】8月第26日～9月5日に1回

- ・ マメシクイガ防除時は、可能な限り、カメムシにも登録のある薬剤を散布する。
- ・ 紫斑病は開花後20～40日を目安に薬剤を散布する。マメシクイガとの同時防除が可能である。
- ・ 薬剤耐性菌や薬剤抵抗性害虫の発生を抑制するため、1回目の散布と2回目の散布で薬剤の種類を変える。1回防除の場合は、2年を目安に使用薬剤を変更する。

(参考) マメシクイガ・カメムシ類・紫斑病に登録のある薬剤

薬剤名	適用病害虫			希釈倍数	使用時期	使用回数
	マメシクイガ	カメムシ類	紫斑病			
トレボン乳剤	○	○	/	1000倍	収穫14日前まで	2回以内
パーマチオン水和剤	○	○	/	1000～2000倍	収穫21日前まで	3回以内
アディオオン乳剤	○	○	/	3000倍	収穫7日前まで	3回以内
		—	/	24倍を0.8ℓ/10a 無人航空機散布		
プレバソンフロアブル5	○	—	/	4000倍	収穫7日前まで	2回以内
				16～32倍を0.8ℓ/10a 無人航空機散布		
ファンタジスタフロアブル	/	/	/	1000～2000倍	収穫7日前まで	3回以内
				16倍を0.8ℓ/10a 無人航空機散布		
プランダム乳剤25	/	/	/	3000～5000倍	開花後～ 収穫7日前まで	2回以内
				16～24倍を0.8ℓ/10a 無人ヘリコプター散布		
アミスター20フロアブル	/	/	/	2000～3000倍	収穫7日前まで	2回以内
				16～24倍を0.8ℓ/10a 無人航空機散布		
※薬剤耐性菌の発生が確認されており連用で効果が低下するため、隔年使用に努める。						

マメシクイガ防除は、幼虫が莢内へ侵入する時期の散布が効果的です。



水量や風圧が十分あり、莢に薬液が付着している

水量や風圧が少なく、莢に薬液が届いていない

散布時期が極端に早いか遅れている

図-3 マメシクイガの薬剤防除のイメージ図